

令和元年6月14日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02592

研究課題名(和文) 日英語の文連結現象において指示表現と名詞節化形式が果たす役割に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on the Role of Referential Expressions and Nominalizing Forms in the Sentence Linkage Phenomena in English and Japanese

研究代表者

大竹 芳夫 (OTAKE, YOSHIO)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：60272126

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日英語の文連結現象における指示表現と名詞節化形式の役割を分析し、両言語の普遍性と個別性を原理的に解明した。具体的には、指示表現を選んでつなぐ事象、突発的に知覚した状況を継起関係に基づいてつなぐ事象、相手の発話を補完してつなぐ事象などを取り上げ、文連結の際の指示表現の選択と名詞節化形式の生起が語用論的要請にどのように動機付けられているのかを明らかにした。また、It's just (that)の直後に休止を伴う現象を観察しながら、発話休止の契機となる諸事由を明らかにし、未発話情報の補完行為についても考察した。本研究成果は学術論文、図書等にとりまとめて社会・国民に迅速かつ広範に還元できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来は個別的または部分的に論ぜられてきた日英語の指示表現と名詞節化形式の選択・出没と文連結現象を原理的に明らかにした点に本研究の特徴がある。本研究成果の一部は、【図書】大竹芳夫(2016)(単著、『談話のことば1 文をつなぐ』(英文法を解き明かす：現代英語の文法と語法 第3巻)東京：研究社)として社会・国民に迅速かつ広範に還元されている。本研究で取り上げた文連結構文は頻用されていることから、本研究成果を言語教育や辞書記述に直接反映できることが予想される。また、文連結及び名詞節化という言語化プロセスの究明は人間の認知構造の解明にも直結し、長期的には言語哲学の新たな展望を開拓するものと期待される。

研究成果の概要(英文)：English and Japanese have been compared and contrasted, and some interesting characteristics have been revealed. In this research, we have made a comprehensive exploration of the role of referential expressions and nominalizing forms in the sentence linkage phenomena in English and Japanese. We have provided a careful investigation of the selection of referential expressions and nominalizing forms English and Japanese in linking sentences in a discourse.

研究分野：英語学

キーワード：日英語比較研究 指示表現 名詞節化形式 文連結 接続表現 つなぎことば 意味論 分詞構文

1. 研究開始当初の背景

言語理論の発展に伴い、日英語の多様な言語現象が比較対照され興味深い特性が明らかにされてきた。本研究では、最近の言語理論研究の成果を活用しながら、日英語の文連結現象において指示表現と名詞節化形式が果たす役割を分析し、両言語の普遍性と個別性を原理的に究明する。

英語の *that* 節及び小節も日本語の「の/こと/もの/わけ」節も、補文内容を名詞節化する共通の機能を有する。また、両言語には話題中の情報の特性を聞き手に合図するさまざまな指示表現が存在する。しかしながら、実際の談話を観察すると、文と文、あるいは場面的状況と文とを連結する際に日英語の指示表現と名詞節化形式の選択と出沒には明確な相違が認められる。

本研究は研究代表者によるこれまでの一連の研究成果で見出された基本的知見と着想を深化、発展させるものである。文部科学省科学研究費補助金平成 11-12 年度奨励研究(A)及び平成 14-16 年度若手研究(B)、日本学術振興会科学研究費補助金平成 18-20 年度、21-23 年度及び 24-26 年度基盤研究(C)の助成を受けて、本研究の対象となる名詞節化形式を含む諸構文のうち、英語の *It is that* 節構文や *take it that* 節構文、*I hate to say it* 節構文、*It turns out that* 節構文、日本語の「{の/こと}(だ)」構文に関する基本的データの収集は既に始まっており、その実証的研究の成果の一部は大竹(1994)('It is that' 構文に関する意味論的、語用論的考察)、『英語語法文法研究』(英語語法文法学会学会誌)創刊号、大竹(1995)('解釈と換言: It is that 節構文と That is 構文の意味と機能について)、『言語文化論集』(筑波大学現代語・現代文化学系)第 40 号、大竹(2001)('時間と空間認知に基づく接続表現: now that / in that 節と「の」節の意味と機能)、『意味と形のインターフェース』下巻、くろしお出版、大竹(2004)('S+take+it+that 節構文の意味と談話機能)、『英語語法文法研究』(英語語法文法学会学会誌)第 11 号、大竹(2007)('日英語の名詞節化構文の意味と機能: {It is that/ S take it that} 節構文と「のだ」構文)、『英語と文法と』開拓社、大竹(2015)('知りたい情報の同定と判明を披瀝する英語の構文: It is that 節構文と It turns out that 節構文の比較対照)、『言語研究の視座』開拓社)等で発表している。モダリティと名詞節化形式の共起制限や、日本語の疑問詞「なぜ/どうして」は名詞節化形式「の」が義務的であるが対応する(Why / How) is it that 疑問文の使用にはより厳しい意味的・機能的制約が課される点等も大竹(1998)('Why is it / How is it 疑問文の意味と機能に関する実証的考察)、『英語語法文法研究』(英語語法文法学会学会誌)第 5 号)で論じ、萌芽的研究は進みつつある。また、日英語の名詞節化形式の諸相に関しては Otake (2002) ("Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction." In T. Ionin, H. Ko, and A. Nevins (eds.). *MIT Working Papers in Linguistics*, Vol. 43. Dep. of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass. マサチューセッツ工科大学) 等で国内外に向けて積極的に発表している。さらに、大竹(2008)(博士(応用言語学)学位論文「「の(だ)」に対応する英語の構文」で体系的・包括的にまとめあげ、2009 年には科学研究費補助金(研究成果公開促進費(学術図書))助成により『「の(だ)」に対応する英語の構文』(単著、くろしお出版、2011 年 3 月に増刷)を刊行し、得られた知見を社会・国民に還元している。

本研究では、これらの萌芽的研究で見出された基本的方向性と着想を、最新の言語理論と照合しながら発展させ、総合的視点から研究成果を積極的に発表する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、文連結現象における指示表現と名詞節化形式の選択という言語事象を通して、日英語の個別性、普遍性の両面を体系的に解明することである。本研究の対象は英語と日本語であるが、個別言語の壁を越えて言語横断的に世界の諸言語における同種の構文との比較対照に敷衍する可能性がある基盤的研究である。このような言語研究は国内、国外においても本格的に行われていないものである。本研究期間内で主に次の 3 点を多角的に研究してゆく。

- (1) 文連結を支える指示表現と名詞節化形式を伴う諸構文を統語的振る舞いの相違に基づいて分類し、各統語的事実を表面的な形式の背後にある抽象的な統語構造と関連付けて説明する。
- (2) 各指示表現や名詞節化形式により言語形式化される伝達内容はどのような情報であるのかを機能的、語用論的観点から明らかにする。
- (3) 文連結における英語と日本語の指示表現と名詞節化形式の選択・出沒を比較対照しながら、日英語の知覚認識メカニズムと文法化過程の個別的側面と普遍的側面の実証的解明を試みる。

3. 研究の方法

次の研究方法に沿って本研究対象となる言語現象に対して研究成果を取りまとめる。

- (1) 本研究課題に関連する従来の研究を、批判的に検証する。日本語の「の/こと/もの/わけ」を含む名詞節化形式及び対応する英語の名詞節化形式を統一的な視点から分析し、体系的に記述するために、基本的な文法概念を提出する。
- (2) 実証的な研究を目指し、研究対象となる日英語の構文が用いられている基礎的資料を収集、観察、分析する。
- (3) 最新の言語学研究の動向を分析し、意味論・語用論研究で扱われる基本的概念や問題点を整理しながら、本研究課題の文連結時の指示表現の選択と名詞節化現象を理論的枠組みの中で分析する基礎を構築する。
- (4) 実際の談話を観察すると、文連結における英語と日本語の名詞節化形式の選択と出沒には明確な相違が認められる。こうした補文標識の選択の相違は、英語と日本語とでは補文に表されるような事象に対する認知的基盤が異なる可能性を示唆する。日英語の名詞節化形式が示す統語的・意味的特性の異同を考察するために、どのような発話場面や状況によりそれぞれの補文が選択されるかを明らかにしながら最近の言語理論との関連性を検証しつつ、話し手の認識と知覚に関わるメカニズムと文法化過程を説明する理論的仮説を立てる。
- (5) 当該仮説に一見反すると思われる諸例について、日英語母語話者をインフォーマントとして活用しながら分析を行い、総合的視点から文連結現象における日英語の指示表現選択と名詞節化形式の生起に関わる制約を明らかにする。

- (6) 東西の諸言語を対象とする従来の個別研究の成果を批判的に検証し、日本語のように名詞節化詞「の/こと/もの/わけ」等を発達させてきた主題表示が随意的な言語と、英語のように主題表示が義務的で補文形式のみならず it の指示特性を活用しながら既定性を積極的に合図する言語等、言語間の既定性の保証過程の異同を統一的視座で解明する。
- (7) 談話や発話場面を分析し、文を連結する際の指示表現の選択と名詞節化形式の生起が語用論的要請にどのように動機付けられているのかを明らかにする。
- (8) 英語と日本語の指示表現が主語位置のみならず、目的語位置にも生ずる構文等も含めて、両言語を統一的視点で比較対照しつつ、文連結現象に指示表現が果たす役割の相違と共通性を原理的に説明する。
- (9) 本研究で得られた言語学的知見が英語教育、日本語教育でどのような教育的意義をもつのかについてもとりまとめて発表し、示唆と提言を行う。
- (10) 研究成果の記述的・理論的意義を体系化し、社会・国民に迅速かつ広範に還元する。

4. 研究成果

研究初年度の平成 27 年度は、実証的研究を目指し、研究対象の日英語構文に関する基礎的資料を収集、観察、分析した。また、基本的概念や問題点を整理しながら、本研究課題の文連結時の指示表現の選択と名詞節化現象を理論的枠組みの中で分析する基礎を構築し、言語学の研究成果を英語教育に活用する方策についても検討を進めた。初年度の成果実績として、大竹(2016a) (『英語の節・文連結を表す諸構文に関する記述的研究』『言語の普遍性と個別性』第7号, pp.1-10.) を挙げることができる。英語の節や文を連結する as a matter of fact, as + {助動詞/be 動詞} + 主語の倒置構文、先行する文を名詞句でつなく構文の3つの表現・構文を取り上げ、それぞれの意味的、形式的特性を明らかにした。第一に、(1)のような as a matter of fact は事実認定を受けていない情報や聞き手には容易には知りたがたい情報を事実として先行する情報につなく機能を果たすことを論じた。as a matter of fact は、聞き手には容易には知りたがたい事実や聞き手の誤解を解くような事実の披瀝を合図する。結果的に、しばしば聞き手を驚かす事実が明かされたり、話し手の知識の優越を感じさせる事実が伝えられる場合がある。そのため、as a matter of fact は聞き手への配慮を表すような表現、つまり話し手の躊躇やためらいを合図する表現と共起することがあることを説明した。

- (1) “[...] People have weird ideas about the size of my income, but as a matter of fact I don't get that kind of fee very often. [...]” (B. Halliday, *Murder Takes No Holiday*, 1961)

第二に、(2)のような as + {助動詞/be 動詞} + 主語の倒置構文が主語を節末に移動して主文とつなく現象を考察した。as + {助動詞/be 動詞} + 主語の倒置構文は文頭、文中、文末の各位置に生じて主文と連結し、主文主語とは異なる主語を立てて「～も同様である」といった意味を伝える。as + {助動詞/be 動詞} + 主語の倒置構文は主文に付随する情報や補足的情報を追記するため、伝達の中心は as 節内の情報ではなく、主文内の情報にあることを確認した。

- (2) You have a destiny, as do I. We have no choice. (R.J. Sawyer, *The Terminal Experiment*, 2011)

第三に、(3a-b)のような先行する文とコンマ、ダッシュ、コロンのピリオドなどを介してつながれる名詞句は、先行する文が表す内容がどのような意味や重要性をもっているのかを聞き手に説明する機能を果たし、回りくどくなく、簡明で直截的な表現である印象を読み手に与える表現であることを実証的に論じた。

- (3) a. There wasn't a sound, a fact which only fanned his ever-building anxiety.
(R. Cook, *Toxin*, 1999)
b. PERU is Portuguese for turkey. A fact which will hold you in good stead if you decide to apply for a job with Bernard Matthews.
(*The Times*, Sept. 16, 2004)

また、大竹(2016b) (単著、『談話のことば1 文をつなぐ』東京：研究社。)の刊行により、本研究の記述的・理論的意義を体系化し、社会・国民に迅速かつ広範に還元することができた。大竹(2016b)は、第2章から第7章までの6つの各論と第8章の結語で構成される。第2章では、基本的な事例をもとに「文をつなぐ」仕組みについて論じた。例えば(4)では、場面や文脈の情報を引き継いでつなぎ合わせる指示表現 it と that の選択には、それが指示することがらを話し手が心にどのようにとらえているのかが反映されることを説明した。

- (4) a. Add seven to five. Now subtract it from twenty.
b. Add seven to five. Now subtract that from twenty. ((4a), (4b): Wolter (2006))

第3章では、「文をつながない」、つまり発話を終結させるメカニズムを実証的に明らかにした。例えば、(5)のように話し手が whatever を用いて、相手の発話内容に無関心な態度で応答し、相手の話題を展開する文をつなぐことを拒絶する事象を考察した。

- (5) Shirley: Samel, you gonna make that phone call today?
Samel: Yeah, whatever. (映画の台詞: *Everyday People* (2004))

第4章「話し手の心を映し出して文をつなぐ」では、話し手の価値感覚や配慮意識がつなぎ表現として具現化することを論じた。具体的には、(6)にみるように、相手にへりくだった態度を示して「一言、よろしいですか？」など予め告げてから本題につなく Can I put my two cents in? のような口語表現を取り上げて、つなぎ表現から見えてくる話し手の心の有り様を浮き彫りにした。

- (6) “I beg your pardon.” Quinn sat on the edge of the wing chair. “But if I could put my two cents in ...” “Take your best shot.” Cale said. (M. Stewart, *If Only In My Dreams*, 2015)

第 5 章では「聞き手の理解に負担をかけずに文をつなぐ」をテーマとし、話の方向を変える場合や情報を訂正、補完する場合に用いられるつなぎ表現を分析した。例えば、(7)のように話し手が言いよどんだときに、聞き手の手助けによって未完結の部分に情報をつないで補完してもらい発話を完結する現象について究明した。

- (7) Brock Lovett: This is Brock Lovett. How can I help you, Mrs ...?
Bobby Buell: Calvert. Rose Calvert.
Brock Lovett: Mrs. Calvert? (映画の台詞: *Titanic* (1997))

第 6 章「場面や文脈情報と関連付けて文をつなぐ」では、静寂の間をことばにしてつなぐ事象や直前の発話内容を理由としてつなぐ just because 節などの分析を通して、場面や文脈情報と文とのつながりを探求した。例えば、(8)にみるような発話直前までは意識が払われていなかったにもかかわらず、突発的に知覚された新たな状況を談話に切り出す the next thing の特性について考察した。

- (8) “I just remember going into hospital in the morning, and the next thing I woke up in intensive care three weeks later. [...]” (P. Harding, *Tinkers*, 2009)

第 7 章では、「情報の橋渡しをして文をつなぐ」というテーマの下に、過去と対比して現在の状況をつなぐ表現 once upon a time (9)のような if 節、unless 節、when 節と共起する{that is / that is to say}などを観察しながら、情報が連結する仕組みを明らかにした。

- (9) “This is a great place to work. When it’s not raining, that is.” (J. Rendell, *The Professors’ Wives’ Club*, 2008)

平成 27 年度は当初計画より進展し、研究で得られた知見を一書にまとめて社会・国民に還元することができた。

平成 28 年度は、研究初年度の研究成果を踏まえながら、談話や発話場面を分析し、文を連結する際の指示表現の選択と名詞節化形式の生起が語用論的要請にどのように動機付けられているのかを検証した。大竹(2017a) (「文をつなぐ」仕組みと「文をつながない」仕組み) 『英語語法文法学会第 25 回大会予稿集』英語語法文法学会. pp.73-81.) および大竹(2017b) (「文をつなぐ」仕組みと「文をつながない」仕組み) (英語語法文法学会第 25 回大会シンポジウム(テーマ「英語の文をつなぐ接続現象」)司会兼講師(招聘)、単独、於:専修大学)) では、従来の研究ではまったく、あるいは詳しく論ぜられなかった文連結現象について実際の言語資料を観察しながら考察した。第一に、(10a-b)のような例を引き合いに出しながら「話し手が何を表現しようとしているかによって指示表現 it と that の選択が決定されること、it の指示対象は相手の発話に先立って話し手が持っている情報を表し、「既獲得情報(already-learned information)」でなければならないが、that の指示対象にはそのような制約はなく、相手の発話などにより話し手が初めて得た情報、「新獲得情報(newly-learned information)」であってもよい。(cf. Kamio and Thomas (1999), Otake (2002), 大竹(2009; 2016))」ことを説明した。

- (10) a. “Thank you, Danny. Thank you for everything.” “Please, don’t mention it.”
Buchanan said. “Please don’t.” (D. Baldacci, *Saving Faith*, 1999)
b. “[...] And you’ve lost all that money.” Stone raised a hand. “Please, don’t mention that again.” (S. Woods, *The Short Forever*, 2003)

第二に、天候・明暗・時間などを表す文と形式主語構文を 1 つの主語 it でつなぐ言語事象について考察した。実際の資料を観察すると、(11a-b)のように文頭に立つ it が天候・明暗・時間などを表す文だけでなく、形式主語構文もつなぐ共通の主語として用いられ、ある場面の状況を描写する用例が確認できる。

- (11) a. “It was drizzling rain and foggy and impossible to see very far. [...]” (B. Towsley, *Benoit Bucks*, 2003)
b. It is dark, but not impossible to recognise the pictures painted all over the walls and roof. (C. March, *Reflections*, 1995)

Bolinger (1977)や中右(2013)でも注目されてきたこうした言語事象の観察に基づいて、明暗や天候を指す it も形式主語 it も共通した指示特性があるものとして英語母語話者がとらえていることを検証した。第三に、That’s that.と That’s it.について考察した。発話の終結を伝達する表現は定型表現として定着している。しかしながら、これ以上文をつなぐに話を切り上げたい、長くなる話を単純化したいという話し手の意図がこうした表現に込められるとき、(12)のように聞き手に切り返されて、結果的には発話が終局を迎えないことになる可能性もあることを実例とともに検証した。

- (12) “[...] That’s why we never married. I guess deep down, we’re a couple of romantic saps. We want it all. That’s that.” “That’s not that. That can’t be.” “It is.” (S. Isaacs, *Lily White*, 2008)

平成 28 年度の研究成果は当初の目標を概ね達成することができた。

平成 29 年度は、文を連結しないメカニズムについて究明した。大竹(2018a) (「It is just that 節構文に観察される発話休止と情報補完」『ことばを編む』東京: 開拓社. pp.170-178.) は、just を伴う It is that 節構文を It is just that 節構文と呼び、同構文の発話が話し手の言いよどみや、他者による横からの割り込みなどによってしばしば発話が休止する言語現象について分析するとともに、同構文の発話休止後の情報補完のメカニズムを実証的に考察し、次の知見が得られた。

- (13) 釈明や弁解の内容が披瀝される時、just を含む“It’s just (that)”の部分が切り出された後にしばしば発話が休止する。just と同様に釈明や弁解の内容が取り立てるほどでもないことを表す日本語の「ただ」も発話された直後に休止することがある。次の(i)で話し手が「ただ」の直後で発話を休止した理由は、感情をありのままことばにすることが聞き手を無用に刺激すると判断して発話をこらえたからである。
- (i) 「別になににもただ」男の気配を感じました、と続いて出そうになる言葉を檜山は咄嗟に呑みこんだ。これを言うことは自分に嫉妬の動機を与えることになると感じたからである。
「ただ、がよく出ますね。ただ、なんですか」「ただ、少し陽気すぎるように思いました。」
 (大岡昇平、『最初の目撃者』, 1979)
- (14) 釈明や弁解の内容を披瀝する It is just that 節構文の発話が途中で休止するのは、(i)話し手には避けようのない事由(= ~), (ii)話し手に起因する事由(= ~)による場合である。
- <発話途中で突発的事態を知覚したために休止する場合> “I didn’t mean to suggest that you did anything wrong. It’s just that —” The arrival of the waiter with coffee terminated the thought. [. . .].
 (J. Deveraux, *Legend*, 2011)
- <発話途中で聞き手にさえぎられたために休止する場合> “[. . .] Look, I’m really sorry it’s just that . . .” “Shhh, it’s okay. Don’t worry about it.”
 (W.K. Williamson, *I’m Not Crazy Just Bipolar*, 2010)
- <発話途中で話し手に喜怒哀楽の感情が生じたために休止する場合> “I’m sorry. Really, I am.” He swallowed, obviously trying to look serious. He failed big time as far as she was concerned. “It’s just that . . .” The laughter won, and he let out a chuckle.
 (M. Hingle, *The Kidnapped Bride*, 2012)
- <発話途中で聞き手の了解を得るための前置きを伝えたために休止する場合> “Tell me something, Michael. We’re not just coworkers, we’re friends, right?” “Of course we are, Eddie. It’s just that . . . well, I’ll just tell it to you straight. And understand that this has absolutely nothing to do with you and me as friends, okay?” “Go ahead.”
 (D. Richart, *Prodigal Bum*, 2014)
- <発話途中で情報を整理して適切に表現するために休止する場合> “What’s wrong with Frankie?” the bird seemed offended. “Nothing,” Ryan scrambled. “Nothing at all. It’s just, his thought stopped short of another offensive statement.” “What?” the bird needed to hear this. “It’s just that,” he hesitated to get the wording right. “Frankie doesn’t seem like a bird’s name.”
 (J.L. Arnett, *Magic Tales: From the Depths*, 2014)
- <発話途中で実情や解釈を披瀝することを控えたために休止する場合> “Uh-oh, does that mean Elizabeth is coming?” Cam inquired. “I hope not,” Freedom said softly. “I don’t mean to sound rude. It’s just that . . .” Freedom was too nice to say what she really thought so Cam finished her sentence. “It’s just that Elizabeth is a power-hungry, stuck-up, snobbish diva who tries to make everyone around her feel inferior?”
 (R. Limbaugh, *Rush Revere and the American Revolution*, 2014)
- <発話途中で説明を放棄したために休止する場合> “I believe you. It’s just that . . . oh, forget it.” He turned back toward the door. “Come on.” “No way. What were you going to say?” He came back to face her. “It’s just that I know that you can do this, and I know that you know, that you can do this. [. . .]”
 (M. Temte, *Urban Cowboy*, 2012)
- 大竹(2018a)は、It is just that 節構文の発話休止後の聞き手の反応、未発話情報の補完行為についても考察し、次の知見が得られた。
- (15) It is just that 節構文の発話休止を受けて、聞き手が発話の完結を寛容な態度で待つ場合がある。同構文の話し手は事の内実や実情といった容易には聞き手には知りたい情報を心中で整理しつつ、釈明や弁解として聞き入れてもらえるように慎重にことばを選ぶ。聞き手がそうした話し手の事情を斟酌するとき、発話の完了を寛容な態度で待ち、「時間が必要ですか？」(=i)と気遣うことがある。
- (i) “You’re not up to it?” retorted the woman. “No, I didn’t say that. It’s just that . . .” Paul didn’t finish his sentence. “You need some time?” “Yes, I need some time to think about it. [. . .]”
 (J. Buda, *Pilgrims’ Passage*, 2014)
- (16) It is just that 節構文の発話休止を受けて、聞き手が発話の完結を促す場合がある。(ii)では“it’s just”と発した直後にことばを詰まらせ、「あっ、気にしないで。何でもない」と発話を切り上げようとする話し手であったが、発話の完結を促されて、ため息まじりに内実を披瀝する場面が描写されている。
- (ii) “Yeah, I suppose you’re right, it’s just . . .” Her voice trailed off. “It’s just what?” “Oh, never mind, it’s nothing.” “Kate?” “Well, it’s just that . . .” she sighed, “you know Wade. He’s always been so protective of you.”
 (J. McNare, *Love Storm*, 2014)
- (17) It is just that 節構文の発話が途中で休止する間隙を突いて、聞き手が「弁解無用」と告げて発話の継続を禁ずる場合がある。
- (iii) “That all our ups and downs are part of the big karmic cycle?” “Yes, but —” Mindy pressed a finger to her sister’s lips. “No buts, remember?” Margo swatted her hand away. “Well, it’s just that —” “No it’s just that, either.” Mindy sighed inwardly.
 (A. Mackay, *Some Like It Kilted*, 2010)
- (18) It is just that 節構文の未発話情報を聞き手が推論して補完することがあり、聞き手の推論に基づく補完内容や補完行為が話し手に肯定的に受け入れられる場合がある。
- (iv) “He wasn’t alone in that, I should add. It’s just . . .” The old king sighed. Kane picked up the sentence for him. “Not all of them were your son.” “Precisely,” Jack said, gravely nodding.
 (J. Axler, *Cosmic Rift*, 2013)

(19) 推論に基づく補完内容や補完行為が必ずしも It is just that 節構文の話し手に肯定的に受け入れられるとは限らない。(v)では話に横から割り込んで補完する警部補に憤慨した話し手がその補完内容を否定し、「口のきき方に気を付けろ」と応答しており、推論に基づく補完行為を非難する様子が描かれている。

(v) She said, "So now someone famous is missing, we get the bodies?" "It's not like that, Detective Friend," Streeter said. "It's just ..." "It's just that Siobhan is so much more important," Murphy said. "That's right, isn't it, sir?" "No. And don't take that tone with me, Detective Inspector." Friend gets a little slack because she's protected from on high. You watch your mouth." (A.D. Davies, *His First His Second*, 2014)

平成 29 年度の研究成果は当初の目標を概ね達成することができた。

研究最終年度の平成 30 年度は、平成 27-29 年度に得られた成果を検証すると同時に、日英語の文連結現象において指示表現と名詞節化形式が果たす役割について、大竹(2018b)（「文をつなぐ」仕組みと「文をつながない」仕組み」英語語法文法学会（編）。『英語語法文法研究』第 25 号。東京：開拓社。pp.5-20.）に研究成果を発表した。あわせて放送大学講座や教員免許状更新講習会等を通じて研究成果を社会に還元した。最終年度の研究成果は当初の目標を概ね達成することができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

「英語の節・文連結を表す諸構文に関する記述的研究」

『言語の普遍性と個性性』第 7 号。査読無。pp.1-10. 2016 年。大竹芳夫（単著）。

<http://hdl.handle.net/10191/40563>

「「文をつなぐ」仕組みと「文をつながない」仕組み」

『英語語法文法学会第 25 回大会予稿集』英語語法文法学会。査読無。pp.73-81. 2017 年。大竹芳夫（単著）。

「「文をつなぐ」仕組みと「文をつながない」仕組み」

英語語法文法学会（編）。『英語語法文法研究』第 25 号。東京：開拓社。査読有。pp.5-20. 2018 年。大竹芳夫（単著）。

〔学会発表〕（計 1 件）

「「文をつなぐ」仕組みと「文をつながない」仕組み」（英語語法文法学会第 25 回大会シンポジウム（シンポジウムテーマ「英語の文をつなぐ接続現象」シンポジウム 司会兼講師（招聘））（2017 年 10 月 21 日。於：専修大学）大竹芳夫（単独）。

〔図書〕（計 2 件）

『談話のことば 1 文をつなぐ』

内田聖二・八木克正・安井泉（編）（<シリーズ>英文法を解き明かす：現代英語の文法と語法 第 3 巻）東京：研究社。総頁数 227 頁。2016 年。大竹芳夫（単著）。

「It is just that 節構文に観察される発話休止と情報補完」

西岡宣明・福田稔・松瀬憲司・長谷信夫・緒方隆文・橋本美喜男（編）『ことばを編む』東京：開拓社。総頁数 429 頁(pp.170-178.)。2018 年。大竹芳夫（単著）。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

なし

取得状況（計 0 件）

なし

〔その他〕（計 6 件）

本研究と関連する研究成果還元講座：

平成 27 年度教員免許状更新講習会

講習名：「言語学から見た英語」，講習題目「実践的コミュニケーション能力を育成する英文法指導の在り方」（2015 年 8 月，於：新潟大学）講師：大竹芳夫

本研究と関連する研究成果還元講座：

平成 28 年度放送大学（文部科学省認可通信教育「英語が映し出す心と言葉の仕組み」）（2016 年 4 月，於：放送大学新潟学習センター）講師：大竹芳夫

本研究と関連する研究成果還元講座：

平成 28 年度教員免許状更新講習会

講習名：「言語学から見た英語」，講習題目「実践的コミュニケーション能力を育成する英文法指導の在り方」（2016 年 8 月，於：新潟大学）講師：大竹芳夫

本研究と関連する研究成果還元講座：

平成 29 年度放送大学（文部科学省認可通信教育「英語が映し出す心と言葉の仕組み」）（2017 年 4 月，於：放送大学新潟学習センター）講師：大竹芳夫

KAKEN: 科学研究費補助金データベース

<https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000060272126/>

研究代表者所属研究機関ホームページ

http://researchers.adm.niigata-u.ac.jp/html/100000139_ja.html

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし